

## 翻訳学習者が誤訳をする理由

MNH-TT の校閲カテゴリ「X3」から見る学習者の訳出プロセスと学習効果

大西菜奈美(関西大学 M) 山田優(関西大学)  
藤田篤(情報通信研究機構) 影浦峯(東京大学)

### Abstract

*MNH-TT, a collaborative translation training platform, includes a menu of “revision categories” that provides an error typology designed specifically for scaffolding translator competence (Toyoshima, et al, 2016; Yamamoto, et al., 2016). Toyoshima et al. (ibid), who analyzed the trends and improvement in error typology with respect to students’ learning level, found a certain error, X3 (content-distortion), constantly the highest in error count. In order to investigate the detailed causes of X3, the authors of the present paper carried out an experiment with five college learners which examined their translation process using screen recording and retrospection interviews. The results show that the root causes of X3 can be subcategorized into two kinds: one in which the translator was unaware of making such errors, and the other where the translator was aware that s/he was facing difficulties but failed to fully grasp the source meaning. The second category can be divided further to include translators who understood the content and aimed at elaborating the target renditions further but without success.*

### 1. はじめに

社会構成主義的アプローチに基づく協同学習 (Kiraly, 2000) とそれによる効果は翻訳学習においてすでに高く評価されており、この枠組を援用する翻訳学習者向け共同翻訳プラットフォーム『みんなの翻訳実習』(以下 MNH-TT)も、翻訳プロジェクト機能を用いて、学習者が実務翻訳のワークフローや構成要素を理解しながら、「翻訳力」(translation competence) 及び「翻訳者力」(translator competence) を高めるためのツールとして使用されることを目指して設計された(影浦 et al., 2016)。「翻訳力」(翻訳コンピテンス)とは、与えられた原文に対して、要求仕様や目的に応じて翻訳を行い、目標言語テキストを作成するために必要となる中核的な力やスキルを指す (ibid., p. 858)。一方、「翻訳者力」(翻訳者コンピテンス)は、専門集団の責任ある一員として振る舞うこと (Kiraly, 200) に関するも

ので、プロジェクトの管理や参加者間の調整、依頼者に対する説明責任を果たす力などが含まれる(影浦 et al., 2016, p. 858)。また後述するようにエラー分類のためのメタ言語を通して、翻訳物に関して客観的かつ一貫した説明ができるようになることも、翻訳者力の一部であると考えている。以上のような理念のもとで開発された本ツールは、これまでに一定の教育的成果を上げ、またその過程で得られる学習データは学習効果分析と把握に寄与してきた。

本プラットフォームの機能の1つに「校閲カテゴリ」の付与がある。指導者が学習者の訳出物を修正・添削する際に用いることにより、翻訳において改善すべき点を意識的に学習するとともに、その全体像に関するメタ学習を促進する機能である。校閲カテゴリ体系は決定木の形式で整理されており、複数の添削者が添削を行った場合でも、カテゴリを比較的一貫して付与できる(豊島 et al., 2016)との主張がある。また、付与された校閲カテゴリは、翻訳者(学習者)に対する一貫性のあるフィードバックも可能にし、大きな学習効果を生むことも検証されている(山本 et al., 2016)。ただし、校閲カテゴリは理由や原因ではなくあくまで訳文上の現象を記述するものであり、背後にある原因はそれを手がかりに別途診断する必要がある。翻訳教育の中で校閲カテゴリを観察すると、校閲対象となる翻訳上の課題全てが一定の学習期間の間に同じように減少するわけではなく、中には、あまり学習効果がみられないエラーの種類も存在する。初学者の翻訳に最も多く付与される[X3 原文内容の歪曲]のカテゴリがこれに該当する(ibid.)。このエラーは、原文の内容を誤って訳した場合に付与されるカテゴリであるが、これが発生する主原因はまだ突き止められていない。

本研究では、学習者の訳出物において X3 が付与された箇所を対象として、翻訳者になぜそのような訳出(誤り、エラー)を生じたのかの原因を探る。具体的には、翻訳プロセスの実験を通して収集した訳出過程の記録と、校閲カテゴリを付与した訳出物を見ながらの回顧インタビューのデータを併用して、学習者の訳出プロセスを記述することにより、誤り発生の心的原因に迫る。

### 1.1. MNH-TT と翻訳教育における添削

翻訳現場では、複数人による協調的な翻訳が主流になっている(O'Hagan, 2011)。翻訳教育においても、協調的な環境での翻訳演習が学習効果を高めると考えられており(Kiraly, 2000)、近年のアクティブ・ラーニングや PBL(プロジェクト主導型学習)も同様の理念に基づいている。このような背景をふまえて開発された『みんなの翻訳実習(MNH-TT)』は、協調的な翻訳を通じて翻訳を学ぶための種々の機能を提供している。

MNH-TT は、翻訳(者)コンピテンスの涵養のための Scaffolding(足場硬め、基礎力づくり)を重視している(Babych et al., 2012)。足場固めとは、翻訳(者)コンピテンスに必要な基礎力づくりとも換言できるが、それは具体的に一体どういうことだろうか。言語的な観点から説明するならば、Vinay & Darbelnet(1995)が主張するように、翻訳を行う際には、まず翻訳の対象となる言語体系による違いを考慮する必要がある、そのための「翻

訳シフト」は義務 (Servitude) であると述べる。たとえば、単語の単数形と複数形の有無に関して英語と日本語で違うので、日本語から英語に翻訳する時には、文法的な問題を考慮しなければならない。このような言語的知識を有していることは、翻訳の必要条件であると考えることができる。他方で、実際の翻訳 (の品質) というものは言語的知識のみで決まるものではなく、非義務的な言語的変更を伴うのが常である。そのための変更や翻訳シフトは翻訳者自身のスタイルと選好によるものであり (これを Vinay & Darbelnet は Option と呼ぶ)、翻訳実務者養成の関心の中心でもある。つまり、翻訳 (者) コンピテンスと直接関係するのは、後者の Option 操作であると容易に想像できるわけだが、逆に言えば、前者の Servitude 操作こそが、そのレベルに到達するための基礎能力 Scaffolding と位置づけることができる。

むろん、翻訳 (者) コンピテンスの全体像は、言語学的なスキルだけを意味しているわけではなく、欧州翻訳修士号 (European Master's in Translation) が示すように情報検索能力、分野の専門知識、異文化能力等をも包含している。このような言語的知識以外の項目に関するスキルにも、「足場の提供」という概念は適用されるべきで、本プラットフォームではその点も重視している。これらは「翻訳知」として総合的にアーカイブ化することができ、蓄積されたデータは後に研究、教育、開発のために活用できる。

## 1.2. [X3 原文内容の歪曲]とは

では校閲カテゴリに話を戻し詳細を見る。MeLLANGE のエラー分類をベースとする本カテゴリ体系は (豊島 et al., 2016)、先述どおり翻訳の基礎力涵養にその威力を発揮するわけだが、山本 et al. (2016) が示すように、1 学期程度の期間では学習効果があまりみられない誤りの種類も存在する。例えば、[X7 用語の訳出エラー]などは比較的短期的に学習効果が現れるのに対して、[X3 原文内容の歪曲]は突出して数が多い誤りである (ibid.)。

では[X3 原文内容の歪曲]とはどのような誤りなのか。基本的には、起点言語の内容と目標言語の内容に単語または文レベルで食い違いまたは不一致が起こっている状態のことを指す。具体例を挙げる(尚、ここでは[X3 原文内容の歪曲]のみに焦点を当て、他のエラーについては触れない)。

【原文】Hospital nurse Colin Norris was imprisoned for life today for killing of four of his patients.

【訳文】病院勤務の看護師であるコリン・ノリスは4人の患者の命を奪った罪に問われていた(罪で終身刑となった)。」

※ (下線部が誤り箇所。括弧内は修正案の一例)

上の例の【原文】では、“...was imprisoned for life”のように主語の Colin Norris が「終身刑に処された」と確定した事実を示しているが、これに対応する【訳文】では、「罪に問われていた」と、罪がまだ確定していない状態を示唆する訳となってしまう。そのため、

原文内容を歪曲したという意味から、【訳文】の下線箇所には、X3 というエラーが付与される。もう一例みてみよう。

【原文】 32 year old Norris from Glasgow killed the four women in 2002 by giving them large amounts of sleeping medicine.

【訳文】「グラスゴー出身のノリスは睡眠薬の過剰投与により、2002年までに(2002年に)4人の女性患者を殺害した。」

ここでは【原文】の“in 2002”が、【訳文】において、「2002年までに」と訳されてしまっている。前置詞の単純な解釈の誤り (in を by または until と読んでしまった) ということではあるのだが、これにより、2002年よりも前に犯行があったかもしれないという曖昧な原文の解釈になってしまうため、「原文内容の歪曲」の誤りが付与される。このように、一般的に原文の意味が歪曲され、原文の本来の内容と異なる「誤訳」がこの誤りに含まれる。

### 1.3. リサーチクエスチョン

以上、繰り返しになるが、[X3 原文内容の歪曲]は先行研究により、学習者の習熟度にかかわらず他のどの誤りより多く発生すること (豊島 et al., 2016)、また誤りを付与しての翻訳学習を続けても誤り数を減らすのが難しいこと (山本 et al., 2016) は判明しているのだが、なぜ X3 が多く起こるのかの原因については明らかにされていない。それは、校閲カテゴリがプロダクトベースの訳文上の現象を記述するものであり、翻訳者の訳出プロセスに焦点が当てられていないことによる。すなわち、どのようにして翻訳者が最終的な訳にたどり着いたのか、また誤りを起こした時に何を考えていたのか、そういった事は分かっていないのである。

このような背景をふまえ、本研究では、翻訳学習者が X3 の誤りを頻繁に生じる原因を、学習者の訳出のプロセスの分析に基づいて調査した。

## 2. 実験と分析

### 2.1. 関連研究と検証方法

本調査の動機が、豊島 et al. (2016) や山本 et al. (2016) にあることは述べた通りだが<sup>注1)</sup>、翻訳プロセス研究に関する文献は数多くあり、本研究も大枠ではその類に位置付けられる。先行研究を大別すると、心理言語学的アプローチ (Lörscher, 1996 等)、TAP (思考発話法) 等を用いた実証検証 (Bernardini, 2001; Englund-Dimitrova, 2005; Tirkkoonen-Conditt & Jääskeläinen, 2002 等多数)、キーボード入力履歴やアイトラッカーを用いた認知的アプローチ (Jakobsen, 2002; O'Brien, 2006 等) がある。また本研究とも密接に関係する校閲 (Revision) に関する先行研究も豊富にある (Mossop, 2001/2014 等)。しかし英語と日本語の言語ペアに限定すると先行研究は、我々が知る限り、語学学習者に焦点を合わせた石原 (2010) や Yamada (2009) のみである。

石原(2010)は、英語学習者の翻訳作業の「こだわりの深さ」を調べるために、文学テキストと新聞記事の翻訳作業を記録して回顧法でその思考の違いを示した。同研究の方法論は実験参加者の回答を分析対象のベースにして、思考の単位（≒翻訳単位）などを量的・質的の両面から分析している。他方、Yamada (2009) は、翻訳作業中の作業時間やキーボード入力といった物理的なデータからのみの収集と分析に徹し、それまでの先行研究と比して、訳出スタイル（例、校閲に費やした時間等）という観点から個々の翻訳者の違いを記述した。

本研究は、石原（2010）の回顧法に依拠し実験を施し、翻訳者の思考に迫る。ただし、本研究の焦点は特定の誤り（i.e., X3 原文内容の歪曲）であることから、石原のように翻訳中の「こだわりの深さ」を測るというよりは、もっと浅いレベルにおいても、頭の中で何が起きているのかを検証することが目的となる。同時に、Yamada（2009）の物理的データの分析も含めることで、「思考」の部分と「物理的なプロセス」とを接合し、多面的に検証できるよう心がけた。

なお、後述するように、回顧インタビューは（石原（ibid.）もそうしているように）、仮説立証型ではなく、ボトムアップ的（グラウンデッド・セオリー・アプローチ的）な手法を採用している。

## 2.2. 実験参加者と使用テキスト

プロセスデータおよび回顧インタビューのデータの収集（英日翻訳）は、筆者らが所属する大学の学部4年生5名を対象に行った。全員が翻訳演習の授業を最低1学期以上履修しており、また翻訳のゼミに所属している。英語力はTOEICスコア770-940であった。

実験に使用した文書は新聞記事の一節で、O'Brien et al. (2014) に掲載されている多くの実験でも使用された“Killer nurse receives four life sentences”である。このテキストは、Carl et al. (2016)の英日での翻訳プロセス研究でも使用し、実験での使用実績は確認済みである。また、今後詳細な分析を行う際にも互換性があるように、同じテキストを採用した。ワード数は148、テキストの難易度レベルはJACET8000のレベル1と2相当の語彙が全体の74.17%を占める。翻訳学習者の英語力を考慮すると、辞書があればさほど困難なく理解することが可能である難易度である（石原, 2010）。

## 2.3. 実験手順

実験参加者である翻訳者は、一人ずつ、用意した部屋において翻訳作業を行った。開始前に研究の趣旨・手順・所要時間・PCの操作法を伝え、同意書に署名をした上で実験を開始した。作業は著者らが準備したPCで行い、プロセスの一部始終を、スクリーンレコーディングツールを用いて録画した。翻訳作業の終了後に、その録画のリプレイを翻訳者と一緒に見ながら、回顧法インタビューを面談形式で実施した。その時の音声のやりとりとリプレイ画面も、同様にスクリーンレコーディングで記録した。

## 2.4. 作業環境

実験環境を図1に示す。翻訳者は作業用のPCで翻訳を行った。観察用モニター（約49インチの大画面モニタ）を挟んで、実験を実施した筆者ら（以下、実験者）と、被験者（以下、翻訳者）が座った。大画面モニタがちょうど敷居のようになり、翻訳者にとっては作業に集中できるような環境が確保できた。逆に実験者にとっては、翻訳者の作業中の画面が大画面モニタに映し出されるので、リアルタイムに翻訳者の作業の様子を観察できた。こうすることで、実験者は画面を見ながら、気づいたところをメモするなど、翻訳作業後の回顧インタビューの（質問等の）準備をすることができた。実験中は、翻訳者からPC

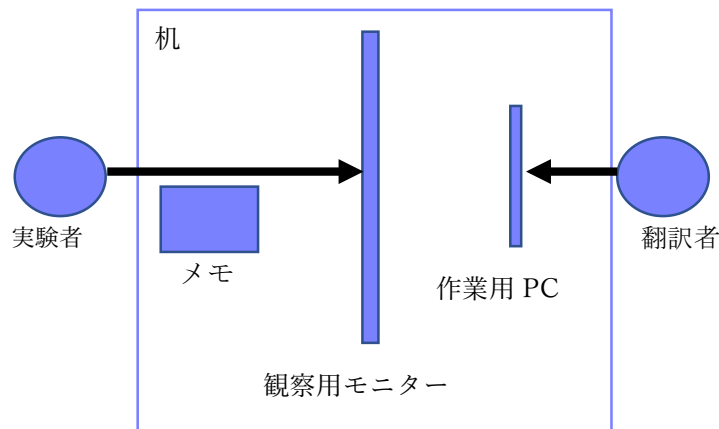


図1: 作業環境

の操作などに関する質問があるとき以外は言葉を発さず、静かに観察を続けた。

翻訳者のPC上には、原文、訳文入力箇所をMicrosoft Wordでそれぞれ別ウィンドウで提示し、Web検索画面も別ウィンドウで提示した（図2）。特殊なツールは使用せず、汎用ソフトを使うことで、普段、彼等が翻訳する時の環境とは大きな齟齬が出ないようにできるだけ配慮した。

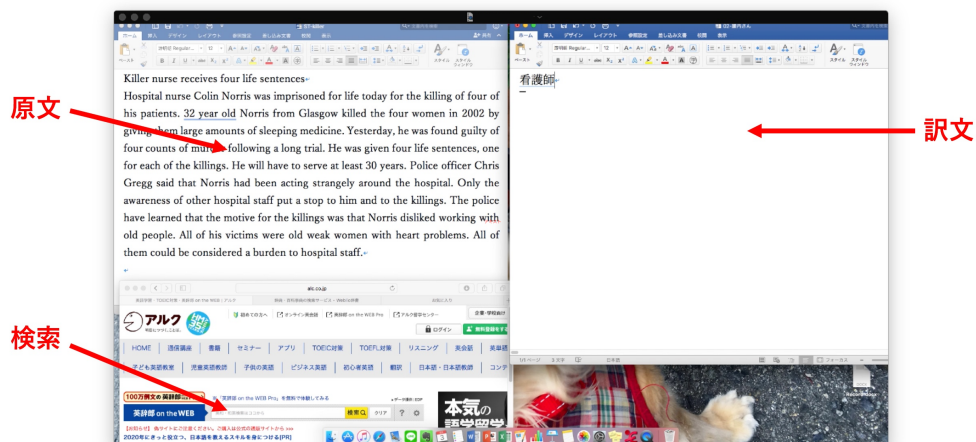


図2: 翻訳者のPC環境

なお、翻訳者への事前指示、いわゆるスコposやブリーフとしては、翻訳対象テキストがニュース記事であったということを考慮し、「ニュース記事を翻訳するようなイメージで訳してください（最終訳出部がニュース記事として成立する品質にするできるだけ近づけるということ）」とだけ伝えた。また、この実験は翻訳者の翻訳の能力を測るのではないため、単語や文法・その他記事に関することであっても、翻訳に使用する PC 上であれば自由に検索が行えると説明した。ただし、PC から離れた検索作業、つまり自分で持ち込んだ電子辞書や紙の辞書、スマートフォンを使用する単語検索は、スクリーンレコーディングの記録に残らないため、禁止した。同様に、紙とペンを使用するメモ作成なども控えるように指示した。加えて、時間制限は、パイロットの結果から「目安として1時間くらいで終わることのできる内容である」とは伝えたが、具体的な制限は設けず、翻訳者が自分で納得するまで続けられるようにし、十分だと感じたら「終わりました」と宣言させた。これらの指示は、できる限り「自然な状況」、つまり（授業で出された課題を自宅で作業をするときのような）縛りのない状況を再現することで、翻訳者の不安やプレッシャーを減らし、通常通りのパフォーマンスができるように配慮したことによる。これ以外には、作業を開始するまで翻訳者には原文が見えないような工夫も凝らした。

## 2.5. 回顧法インタビュー

回顧法とは、面接法や質問紙などを用い、タスク終了後に協力者が自らの思考過程を振り返って報告するという、翻訳プロセス研究においてしばしば用いられる手法である(石原, 2010)。情報の損失や主観によって再構造化・再符号化されるという問題点も挙げられるが、刺激再生法(Garner, 1988)やインタビューの際の工夫などにより、その懸念が解消されうると考えられる(石原, *ibid.*)。本研究では、スクリーンレコーディングによって翻訳者の記憶再生を促しながら、オープンクエスチョンの手法を採用し、実験者による回答の誘導がないよう留意した上で、回顧法でのインタビューを行なった。

翻訳者による翻訳作業終了の申告後、実験を行なった教室を退出し、15分程度休憩を取らせた。その間に実験者は、翻訳者が完成させた訳文に校閲カテゴリを付与し、回顧インタビューの準備を行った。

インタビューの質問に答える際の指示として、わからないことに対しては、無理に理由を作らず「わからない」「覚えていない」と答えても問題がないことを伝えた。これは、強制されて何か理由等を述べなければならないというプレッシャーから、本来と異なる事実を述べてしまう可能性を避けるためである。さらに、質問の箇所全てが誤りに関するものではないとも伝えた。

質問は、[X3 原文内容の歪曲]のみに限定せず、他の種類の誤り箇所についても行った。他には、翻訳作業中に、長時間停止していた箇所、修正していた箇所、検索を行なった箇所、特異な動きをしていた（マウスが画面上でウロウロしていた、など）箇所等も、随時質問をして、誤りとの関連性があるかどうかについても調査した。具体的には、「この単語

はどのように調べたの」「ここはどのように止まっていたの」「ここでは何をしていたの」というようなものであり、翻訳者の回答によって、追加質問等も加えた。回顧インタビューの所要時間は30分から40分であった。

## 2.6. 分析方法

以上のようにして、5名から集めたデータの分析を行った。回顧インタビューについては、まず大部分を書き起こし、質的分析の観点から、思考や行動を共通項で分類した。[X3 原文内容の歪曲]だけでなく、その他のカテゴリについても付与を行い、スクリーンレコーディングの記録を参照しながら、どの箇所についてどのような回答を行なっているのかを書き出すことで、その誤りの理由をまとめることができた。最終的に、X3が付与されたものに焦点化して、類似する理由をまとめた。

また、スクリーンレコーディングのデータと校閲カテゴリを付与した訳文データについては、翻訳・修正に要した時間と、各誤り・情報検索の数などの集計という量的分析を施した。

## 3. 分析結果

### 3.1. 回顧インタビューによる質的データ結果

#### 3.1.1. 「考慮」が不十分、ないし「考慮」がされていない誤り

まず、回顧インタビュー結果をまとめる。[X3 原文内容の歪曲]が付与された箇所に限定して説明する。下は、X3が付与された誤りを含む原文・訳文と、その箇所に関してのインタビューによる回答である。

#### (1) 不注意に起因する誤り

【原文】 32 year old Norris from Glasgow killed the four women in 2002 by giving them large amounts of sleeping medicine.

【訳文】 グラスゴー出身のノリス被告は睡眠薬の過剰投与により、2002年までに4人の女性患者を殺害した。

#### 【インタビュー内容】

実験者：ここ、この後に「2002年までに」ってしてるんやけど、ここ「までに」ってしたのは何か理由はある？

翻訳者E：ないです。完全に by と in を（読み）間違えました。無意識ですね。

実験者：今（録画を）見て「by と in と間違えたんかな？」みたいな感じかな

翻訳者E：はい。

この誤りは、学習者の英語力からしても“in”という単語の意味自体がわからなかったのではなく、かといって何か文脈を考慮した上で「までに」と訳したわけでもない。インタビューからわかるのは、翻訳者Eは、原文にきちんと注意を向けておらず、「（読み）間違え



ました。無意識ですね」と言っているように、無意識的に訳したことが原因で起きた誤り、つまり「不注意」による誤りだと考えられる。これを、便宜的に「不注意に起因する誤り」としておく。次の例をみる。

(2)思い込みに起因する誤り

【原文】 He will have to serve at least 30 years.

【訳文】 懲役30年以下の刑罰となった。

【インタビュー内容】

実験者：この「以下」っていうのは？

翻訳者 C： at least を「以下」って訳しました。

この誤りは、“*at least*”の意味自体を取り間違えて起こした誤りである。単語の意味を翻訳者 C が誤って記憶しており、それにもかかわらず（それゆえに）その意味が間違っていると疑わない。自分の記憶の中にある語彙知識で正しいと判断しているため、単語の意味を辞書などで調べることもなく、そのまま訳してしまう「思い込み」による誤りである。

上の2つは、一見すると種類の違うものであるが、(1)のような不注意に起因する誤りは原文に対し配慮（注意）が足りていない、また(2)の思い込みに起因する誤りは、訳語における他の意味の候補に対して、考慮がされていないために起こった誤りというように分類できるかもしれない。いずれも「配慮」ないし「考慮」が不足している、または「意識的」に作業がされていないことに起因する誤りである。次の例と比較してみると、もう少しこの分類がクリアになるだろう。

3.1.2. 「考慮」はされている誤り

上では「考慮がなされていない」誤りをまとめたが、次に見る例は、翻訳者が誤り部分に関して何かしらの考慮をした（注意を払った）にもかかわらず、結果的に原文の内容の歪曲が生じて（誤訳して）しまったものである。

(3) 原文の意味に対する迷い

【原文】 He will have to serve at least 30 years.

【訳文】 最短でも30年はあると見られている。

【インタビュー内容】

実験者：ここも結構悩んでたよね

翻訳者 D：悩みました。その、“*serve*”っていうのが、本当に自分の思っている意味なのかわからなかったんですけど、その、牢屋に入っている時間を指すんだったら、ちょっと硬い日本語で言ったらなんていうのかなと思って考えてたんですけど、あんまり思いつかなくて、結局30年はあるみたいな、よくわからない訳になった。... (略) ...なんか、よくわからなかったです。感覚で訳してしまいました。

この誤りについては、翻訳者 D は原文における“serve”の解釈がよくわかっておらず、自身も意味がわかっていないという認識（自覚）がある。これは先の例のように自分が誤りをしている状態を認識していないのとは異なる。しかし意識がある、もしくは考慮をしているのだが、結局自分の中で良い訳であると納得できる訳が思い浮かばず、原文の意味も未把握の状態によくわからないまま、最終的には「感覚的に訳してしまった」ために起きた誤りである。

#### (4) 原文の意味を取り違える

【原文】 32 year old Norris from Glasgow killed the four women in 2002 by giving them large amounts of sleeping medicine.

【訳文（翻訳者 A）】 2002 年、グラスゴー出身の当時 32 歳のノリス容疑者は 4 名の女性患者に大量の睡眠導入剤を与え殺害した。

【訳文（翻訳者 D）】 2002 年、グラスゴー出身で当時 3 2 歳であったノリスは 4 人の女性に多量の睡眠薬を投与し殺害。

#### 【インタビュー内容】

実験者：ここ「当時」ってつけてくれてるんやけど、「当時」ってつけたのは？

翻訳者 A：えっと、私の勝手な想像なんですけど、ここの長い間裁判ってあって（←この文章ののちに、“following the long trial”という表現が出てくる。そこを指している）、その有罪が決まるまで多分時間あったんで、今は何歳かわからないけど、この時は 32 歳だったのかなって。

実験者：うんうん、そっか。その、32 歳が 4 人を殺した時っていうふうに決めたのは、ここに 2002 があるから？

翻訳者 A：そうですね。

同じ箇所でもう一人、同じ誤りをしているので、その翻訳者の理由も記す。

実験者：これも初め（括弧書きで）32 歳やったけど消したもんなあ。

翻訳者 D：あ、はい。...（略）...2002 年なのに括弧で 32 ってやっちゃうと、今 32 歳って感じがするから、それやったら当時って付けた方が良いのかなって

実験者：なるほど。じゃあ、これは 2002 年に、32 歳って思ったってこと？

翻訳者 D：はい。

実験者：そっかそっか。それって、ちょっと難しい質問かもしれないんやけど、なんで当時 32 歳やと思ったん？

翻訳者 D：最初は、これ（in 2002）がここ（32 year old）にかかっているのかなっていうのと、あと終身刑、私終身刑わかってないと思うんですけど、終身刑で 30 年ある

っていうところから (←この文章ののちに、“he will have to serve at least 30 years” という文が出てくる。そこを指しているもの)、このニュースが今っていうのを 仮定して、2017年としたら、今(この人は)40, 50くらい。で、30年の終身刑で80歳くらいかなって逆算して、今32歳やったらあと30年でも生きてるかもって思って、そうしました。... (略) ...30年は牢屋にいるみたいな意味だったら、30年後に死ぬっているのを考えると、今32歳で30年後62歳やったら、まだ死なないかなと思って。そんな感じです。

この2名は、同じ箇所と同じ誤りを生じた。両者とも、構文とコンテキストの両方を考慮はしているのだが、正しい意味を理解できずに同じ誤りを起こしてしまった。つまり、翻訳中にこの箇所で立ち止まり、色々と「意識的に」考えて、考慮をしたのだが、最終的には原文の内容を誤解してしまったゆえに起きた誤りだと考えられる。これを「考慮はされている誤り」と分類した。

ちなみに、この誤りを、原文の構文情報だけに頼って「当時32歳」と解釈する可能性を排除するのであれば、実際にはかなり難しいことだったかもしれない。しかし、この翻訳者たちが、ウィキペディアなどで文書に関する検索、すなわち言語情報以外の検索を行っていたならば、犯人が何歳の時に犯罪を起こし、そして判決を言い渡されたのかを調べることができたのかもしれない。つまり、「考慮をした」というところまでは良かったが、正解にたどり着けなかったという意味では、検索能力などのスキルが不十分であったと考えることもできよう。

#### (5)より適切な訳を求めて

上の(1)~(4)の誤りは、当該箇所に対しての考慮の有無の観点から分類したが、結局は原文の内容が正しく理解できていないために起こった誤りであったとしてまとめることもできる。一方、次に見る例は、原文の内容が正しく理解できていたにもかかわらず、X3がついてしまった誤りである。

【原文】 Police officer Chris Gregg said that Norris had been acting strangely around the hospital.

【訳文】 ---クリス・グレッグ警部は、ノリス被告は以前から病院内で、不審な行動があったと伝えた。

【インタビュー内容】

実験者：この“Police officer”のところにやってくるんやけど。結構調べるけど、気になるんね？

翻訳者 E：気になりましたね。

実験者：自分の中で、探してる時に、これにしたら良いかなみたいなのが、結局思いついたのが、警部？なんで警部にしたん？

翻訳者 E：警部、私はまず、候補が、警部、捜査官？あと何やったかな。ぐらいかな。

実験者：いくつか調べてたよね。捜査官と警察官？警察だけやったかな。

翻訳者 E：あ、警察は、インタビュー答えてる人じゃないな、って、人を言う時には使ってるものじゃないなって思ったけど、原文に警察ってあったから、警察は調べて、で、日本語の候補が警部・捜査官ってあって。で、(検索して)警部は)かなりの高位ってなってるから、で、捜査官は私服？って書いてたっけ。だから...  
(略) ...

実験者：じゃあ、警部の位が高いから、警部にしたって感じ？

翻訳者 E：そうですね。聞いたことがある中でやったら、警部。で、調べた結果も間違っていないのではと思って。

この翻訳者 E は、原文の“*Police officer*”というのが、「警察官」という意味だと知らなかったのではなく、それがわかった上で、日本語のニュース（というレジスタ）に合うような訳にするにはどうすれば良いかということ考えた上で訳していることがわかる。もう一つ、例を挙げる。

【原文】 The police have learned that the motive for the killings was that Norris disliked working with old people.

【訳文】 警察庁は被告人が老人相手の看護に嫌気が指したことが殺害の動機であると発言している。

【インタビュー内容】

実験者：これも警察庁にしたのって、その“*police*”を調べて...

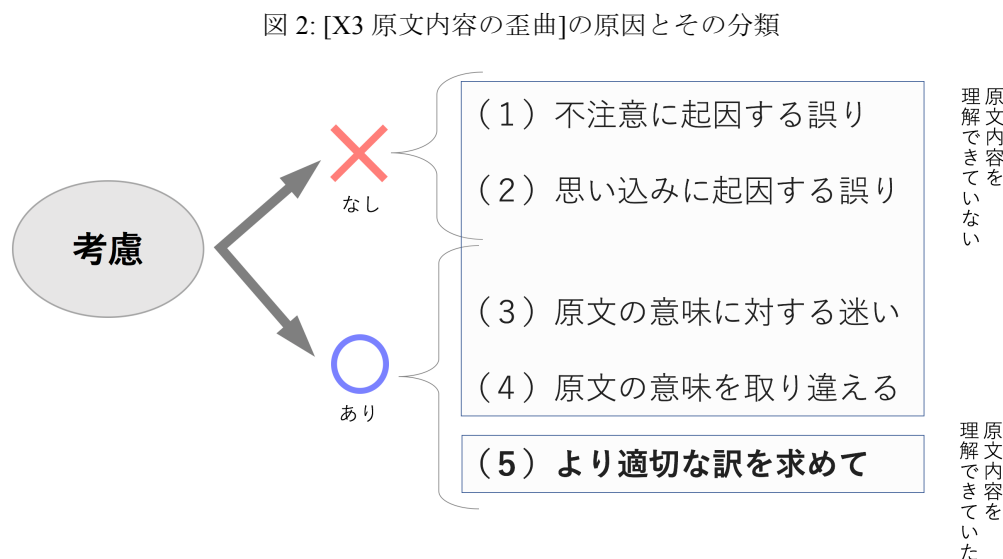
翻訳者 C：この“*police*”はあの、グレッグさん？グレッグさんじゃないと気づいたんで。  
“*police*”って警察のこと言ってる。“*police man*”じゃないと思って。で... (警察という訳を介した後に、単語なども調べて)警察庁って書こうと思ったんですけど、日本語ではこれでいいんですけど、海外で警察庁って言うんかなと思って調べて、まあ警察庁でいいかと思って。

この翻訳者 C も、原文の“*The police*”を「警察」という意味で最初は正しく理解できていたが、調べた後に「警察庁」に変更してしまった。結果として、意味の相違を生んでしまっている。検索を行って工夫を加えたがために起こしてしまった、いわゆる「改悪」をってしまった例であろう。

いずれにしても、この2つの訳例と翻訳者によるインタビュー結果をみてわかるように、[X3 原文内容の歪曲]の中には、原文内容は正しく理解できているが、より適切な訳にするために工夫を加え、それが上手くいかなかったために誤りとなってしまうものが含まれている。翻訳の基礎力づくりという観点からは、この2名の操作は、他の(1)~(4)の例よりも基礎力が高いレベルにあるとみなすことも可能である。

## 3.2. インタビューのまとめ

以上をまとめると、インタビューの結果から、[X3 原文内容の歪曲]が起こる原因は図 2 のように分類できる。



まず、誤り箇所に対する「考慮」がなされているかどうかの一つの分岐点である。その後は、上でみたように細分化できるが、(1)～(4)の誤りは原文の内容が正しく理解できていないことを起因とする点で共通する。しかし、(5)の最下部は、より適切な訳にするための操作を行ったために起きてしまった誤りであり、翻訳者が原文の内容を正しく理解できていた、という点においては他の誤りと性質が異なると考えられる。

## 3.3. 翻訳スタイルとの関係：数的データの結果

次に、翻訳者の翻訳スタイルと[X3 原文内容の歪曲]との関連性を探るために、翻訳者別に各項目の所要時間と、検索・参照数をまとめた結果を下記の表 1、表 2 に示す。ここで関心は、上のようなプロセス中の思考の分類と、翻訳中の物理的な操作と間に、なんらかの関係があるのを見ることである。(1)所要時間については、Mossop (2001) および Yamada (2009) を参考にした。(2)情報の検索・参照数については、基本的には、言語的な検索（例：辞書引き）、または言語的な情報から離れた検索（例：ウィキペディアや実際にウェブ上に掲載されていたニュースを参照するなどの検索）というように分類した。

## (1)所要時間

翻訳スタイルと関係する所要時間は下記のように分類した (Mossop, 2001; Yamada, 2009)。表 1 に記す。

- Pre-drafting phase : 翻訳作業開始からキーボードで訳文の 1 文字目を打ち始めるまでの時間

- Draft : 翻訳を開始してから訳し終えるまでの時間（但し、この後の推敲の時間は除く）
- Revision : 修正時間（いわゆる Post-drafting Revision）で、上の Draft の後に行われる修正時間
- Total : スクリーンレコーディングの開始から終了までの全作業時間

(2)情報の検索・参照数（時間）

検索・参照の回数およびその時間は、以下のように分類した（表2）。

- 英語検索：英語の単語・文法の検索の回数および時間
- 日本語検索：日本語の単語・文法の検索の回数および時間
- その他の検索：上の2つのような言語に関する検索ではない情報の検索(ニュース記事で文体を調べたり、ウィキペディアで関連情報を調べたり)の回数および時間

(3)X3の誤り数

上記に加えて、各翻訳者に付与された[X3 原文内容の歪曲]の誤り数もまとめた（表3）。

表1：翻訳者別 各項目所要時間

翻訳者	Pre-drafting	Draft	Revision	Total
A	01:49	24:16	07:10	33:15
B	03:43	31:55	05:48	41:26
C	05:04	23:53	16:46	45:43
D	02:40	36:37	03:28	42:45
E	01:01	39:37	01:06	41:44

表2：翻訳者別 各項目の検索・参照数。( ) 内の数値が時間を表す。

翻訳者	英語検索	日本語検索	その他の情報検索
A	6 (00:00)	0 (00:00)	2 (00:00) <sup>注2)</sup>
B	9 (04:16)	0 (00:00)	0 (00:00)
C	20 (05:22)	5 (01:27)	13 (02:17)
D	5 (03:47)	0 (00:00)	2 (01:07)
E	10 (05:25)	1 (00:48)	13 (09:07)

まず表1では、翻訳者CのPre-Drafting時間とRevision時間が比較的長いことがわかるが、おおむね全ての翻訳者のDraftingに掛けた時間が全体的に長く、Revisionに費やした時間が短いといえる。これは初心者翻訳者に典型的な時間配分であるとも言えるのだが（Yamada, 2009等）、最近の研究では必ずしも独立したRevision段階を設けず、ほとんど

の作業を in-draft で行う熟練翻訳者たちの多く観察される (Malkiel, 2009) ことから、この表の結果だけからは特に何も結論づけることはできない。

しかし、表 2 を見ると、翻訳者 C と E は英語の検索数と時間が多く、また「その他の情報の検索」数も圧倒的に多いことがわかる。つまり、この 2 名は、辞書を頻繁に使用してはいるが、辞書以外のソース、例えばネット上に実在するニュース記事を参照したり、日本語の類似記事などを検索したりして、構文や文体についても適切に訳そうとする努力していた。

しかし、下の X3 の誤り合計数の表 3 を見ると、翻訳者 C と E は他の翻訳者に比べて X3 の付与数も他の翻訳者より多いことがわかる。検索において見られた努力もむなしく、実際の誤り数は他の翻訳者よりも多いのだ。また、これは上の回顧インタビュー結果でみたように、原文の内容は理解していたのだが、より適切な訳にするための操作を行ったために起きてしまった誤りということと、関係していると考えられることもできる。

表 3 : X3 の付与数

翻訳者	X3 の付与数
A	2
B	2
C	5
D	2
E	5

#### 3.4. 結果のまとめ

回顧インタビューの結果から、[X3 原文内容の歪曲]が起こる原因として、翻訳者が誤りを起こした箇所に対して、何かしらの考慮をしたかどうかで（意識的に注意を払っていたかどうかで）、まず 2 つに分類した。考慮をしていない翻訳者は、自分が誤りをしてしまった事すらも認識できていない。それでいて原文の内容を正しく理解もできていない。これに対して、考慮できていた翻訳者は、そこに翻訳の困難があると認識はしていたが、原文内容を正しく理解することができなかつた者がいた。しかし、考慮できていた翻訳者の中には、原文内容を理解していたにもかかわらず、より適切な訳文にしようと試みたが、結果的にその行為が原文内容の歪曲を招いてしまったケースがあった。

これらの結果をベースに、翻訳プロセスにおける検索行動と誤り総合数を検証してみると、より適切な訳文にしようと試みた翻訳者 (C と E) は、言語的な意味を調べるだけでなく、「その他の情報の検索」の回数とそれに費やした時間が他の翻訳者よりも長いことが観察された。しかし、この 2 名は X3 の誤り数でも他の翻訳者より多く、この項目を見る限りでは、成績が最も悪い翻訳者に分類されてしまっていた。見方によっては、翻訳者 C と E は、他の翻訳者よりも翻訳者コンピテンス(翻訳者としての言語的知識や情報検索など

の能力)が高い可能性もあることから、X3 の出現数は、翻訳者としての能力を正しく反映していないかもしれないといえる。

#### 4. 教育的示唆とまとめ

上述の結果より、[X3 原文内容の歪曲]は、翻訳者（学習者）が当該エラーに対して「考慮」や「注意」が向いていたのか否かに応じて、教育的な指導方法を切り替えることの必要性が示唆される。考慮がされていない訳にした翻訳者や、原文内容を正しく理解できていない翻訳者への指導は、基本的な語彙学習を含む語学力の向上や、意識的に情報検索をすること、また意味を分かっているつもり単語などについても、意識的に調べ直すというような事柄の指導を行うことが大切である。

これに対して、原文内容が正しく理解できているのに誤りを起こしてしまった翻訳者には、異なる指導が必要であろう。そもそも、現状の校閲カテゴリは、翻訳作業が完了したプロダクトに対して誤りの箇所が付与することを前提としており、翻訳プロセスの詳細にアプローチしてカテゴリ付与を行うものではない。そのため回顧インタビューの(5)や翻訳者 C と E に見られたように、「より適切な翻訳にすることを意図したが不適切になってしまった」学習者は、「わからなくて訳した」者とは区別され、教授＝学習過程でフォローされる必要がある。

したがって、MNH-TT を使用した翻訳教育の提案の 1 つとして、一連の作業の中に、レスポンスを行うことが効果的であると考えられる。指導者または学習者同士で校閲カテゴリを共有してカテゴリ付与を行った後に、訳した本人から「この訳は、A といった理由でこうしたんです」というようなレスポンスをふまえて議論をする。このような指導を行うことで、学習者の努力の意図が明確になり、翻訳者の努力を間違いとして認識させてしまうのではなく、具体的に「どのように（工夫）すればよかったのか」という指導につなげられるのではないだろうか。また、指導者も学生からのレスポンスを受けることにより、指導法の改善を行うことも可能だろう。

#### 5. まとめ

本稿では、インタビューと翻訳スタイルの分析を通じて、[X3 原文内容の歪曲]の原因を検証した。観察された結果のうち、改めて強調しておくべき点は、原文内容を理解していたにもかかわらず、より適切な訳文にしようと試みた翻訳者の誤りが、X3 カテゴリに含まれてしまっている可能性があることである。翻訳(者)コンピテンスの涵養につなげるためにも、翻訳者からの、プロセスに関する説明やレスポンスの提示が重要であることを指摘した。

なお、本検証の実験参加者数は少数で、対象とした文書も 1 件のみであり、今後より多くのサンプル数で追試を行う必要がある。また、今回の回顧インタビュー分析では、翻訳者の「考慮」の有無、文意理解の有無の観点から分類したが、これらの妥当性も再検証する必要がある、必要に応じてさらに精緻化して、細分化を行う必要があるかもしれない。引き続き、MNH-TT を使用した翻訳教育へ実践し、翻訳者からのレスポンスも交えながら、



「翻訳知」をアーカイブ化し、翻訳(者)コンピテンス向上の効果を検証していきたい<sup>注3)</sup>。

.....

**【謝辞】**

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤(A)「翻訳知諫アーカイブ化を利用した協調・学習促進型翻訳支援プラットフォームの構築」(研究課題番号:25240051)の支援を受けて行われた。

.....

**【筆者紹介】**

大西菜奈美 (ONISH Nanami) 関西大学 外国語学部・外国語教育学研究科 博士前期課程在籍。2017 年関西大学外国語学部卒、現在、同大学院外国語教育学研究科で、学習者の翻訳プロセスについて研究する。

山田優 (YAMADA Masaru) 関西大学 外国語学部・外国語教育学研究科教授。ウエストバージニア大学英米文学部卒、同大学院言語学修士、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了。博士(異文化コミュニケーション学)。関西大学外国語学部准教授を経て、2017 年より同教授。研究の関心は、翻訳プロセス論、翻訳テクノロジー論、翻訳教育論(TILT)など。

藤田篤 (FUJITA Atsushi) 情報通信研究機構・主任研究員。2000 年九州工業大学情報工学部卒、2002 年同大学院情報工学研究科博士前期課程修了、2005 年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。京都大学大学院情報学研究科産学官連携研究員、名古屋大学大学院工学研究科助手、同助教、公立はこだて未来大学システム情報科学部准教授を経て 2014 年より情報通信研究機構ユニバーサルコミュニケーション研究所主任研究員、同先進的音声翻訳研究開発推進センター主任研究員。専門は自然言語処理。主に言い換え表現の生成と認識、機械翻訳の研究に従事。

影浦峡 (KAGEURA Kyo) 東京大学・大学院情報学環／教育学研究科・教授。1986 年東京大学教育学部卒、1988 年同大学院教育学研究科修了。学術博士(マンチェスター大学)。1988 年学術情報センター助手、同助教授、2000 年国立情報学研究所助教授、2005 年東京大学大学院教育学研究科助教授、准教授を経て 2009 年同教授。専門は言語のデカルト的使用について、ターミノロジー、翻訳論。

.....

**【註】**

- 1) 本研究の主目的はエラーカテゴリを再考することでなく、エラーが生じた過程(プロセス)を調査することである。そのため、本稿ではエラーカテゴリに関する先行文献レビューは

行っていない。MNH-TTのエラーカテゴリの検討と決定に関しては、豊島 et al. (2016) 等を参考にされたい。ただし、エラーカテゴリの翻訳教育の活用が本稿のスコープの一部である限りにおいて、欧米・西洋的なカテゴリの検討だけでなく、日本国内の実務翻訳者たちの模範的 (prescriptive) な分析・分類の書も、実践的な知見を得るためには重要である。その意味では、古典的良書、安西徹雄 (1982) 『翻訳英文法』バベル・プレスや小沢勉 (1998) 『ミニマル・トランスレーション』バベル・プレス等で示されている翻訳の方略的カテゴリ (Vinay & Darbelnet, 1995 のプロセスにおける訳出方略の説明のようなもの) を考慮することも必要と思われる。今後の課題としたい。

- 2) 翻訳者 A の ( ) 内の検索時間は録画ファイルの問題が原因で正しく計測できていない。回数は確認できている。
- 3) 具体的には、プロダクトに付与したエラーカテゴリの収集データを軸に、学習者の説明やレスポンス等を中心とするプロセスデータをもう一つの軸として追加し、多面的にエラーの推移を分析することが考えられる。エラーカテゴリの習得はメタ言語の習得であるので、学習者の心的な成長を促すと考えるからこそ、その内面的過程 (プロセス) を記録してプロダクトと比して分析することは大切である。

#### 【参考文献】

〈英語文献〉

- Babych, B., Hartley, T., Kageura, K., Thomas, M., & Utiyama, M. (2012). MNH-TT: a collaborative platform for translator training. *Translating and the computer*, 34, 1-18. [Online] <http://www.mt-archive.info/Aslib-2012-Babych.pdf> (Retrieved, September 30, 2017).
- Bernardini, S. (2001). Think-aloud protocols in translation research. *Target*, 13(2), 241-263.
- Carl, M., Yamada, M., & Aizawa, A. (2016). English-to-Japanese translation vs. dictation vs. post-editing: Comparing translation modes in a multilingual setting, *LREC conference*, pp. 4024-4031.
- Englund Dimitrova, B. (2005). *Expertise and explicitation in the translation process*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Garner, R. (1988). Verbal report data on cognitive and metacognitive strategies. In C. E. Weinstein., E. T. Goetz., & P. A. Alexander. *Learning and study strategies: Issues in assessment, instruction, and evaluation* (pp. 63-76). San Diego: Academic Press Inc.
- Jakobsen, A. (2002). Logging target text production with Translog. In G. Hansen (Ed.), *Probing the process in translation: Methods and results. Copenhagen Studies in Language*, 24. (pp. 9-20) Samfundslitteratur: Copenhagen.
- Kiraly, D. (2000). *A Social constructivist approach to translator education: Empowerment from theory to practice*. London/New York: Routledge.
- Lörscher, W. (1996). A psycholinguistic analysis of translation processes. *Meta*, 41(1), 26-32.

- Malkiel, B. (2009). From *Ántonia* to My *Ántonia*: Tracking self-corrections with Translog. In Göpferich, S., Jakobsen, A. L. & Mees, I. M. (eds), *Behind the mind. methods, models and results in translation process research*. Copenhagen: Samfundslitteratur. 149–166.
- Mossop, B. (2001/2014). *Revising and editing for translators*. New York: Routledge.
- O'Brien, S. (2006). Eye-tracking and translation memory matches. *Perspectives: Studies in translatology*, 14(3), 185-205.
- O'Brien, S., Winther Balling, L., Carl, M., Simard, M., & Specia, L. (2014). *Post-editing of machine translation : Processes and applications*. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.
- O'Hagan M. (2011). Introduction: community translation: Translation as a social activity and its possible consequences in the advent of Web 2.0 and beyond. *Linguistica Antwerpensia*, 10, 1–19.
- Tirkkoonen-Condit, S & Jääskeläinen, R. (2000). *Tapping and mapping the process of translation and interpreting: Outlooks on empirical research*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Yamada, M. (2009). A study of the translation process through translators' interim products. 『通訳翻訳研究』, 9, 159-176.
- Vinay, J-P., & Darbelnet, J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation* (J.C. Sager, & M.-J. Hamel, Trans.). Amsterdam: John Benjamins.

〈日本語文献〉

- 石原知英 (2010). 『翻訳における言語意識 —プロセスの記述とプロダクトの評価をめぐって—』, 未刊行 博士論文 広島大学.
- 影浦峽, Harley, A. Thomas, M., 内山将夫. (2016). 「みんなの翻訳実習における『足場』と翻訳力・翻訳者力 ～みんなの翻訳第 6 報～」『言語処理学会 第 22 回年次大会 発表論文集』, 857-860.
- 豊島知恵, 藤田篤, 田辺希久子, 影浦峽, Hartley, A. (2016). 「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」『通訳翻訳研究への招待』 16, 47-65.
- 山本真佑花, 田辺希久子, 藤田篤. (2016). 「翻訳学習者の学習過程におけるエラーの傾向の変化」『言語処理学会 第 22 回年次大会 発表論文集』, 865-868.